

FADO

28

Outubro 2000

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

8月3日、堺で開催中の世界芸能博覧会に行ってきた。ポルトガルはコインブラからコインブラファドのグループ「プラクシス・ノヴァ」が参加していた。サンパ大好き、ファド大好き、カンテフラメンコを即興で路上で唄う、沖縄民謡は唄うは、ベリーダンスまで踊る、プロの芸人顔負けの、パフォーマンスを繰り広げている20才のMIOちゃんが同行してくれた。真夏の午後の日差しの中でひたすらビールを飲む私。堪えきれずにサンパチームの踊りのステージに上がり、白けた観衆の前で発散しきれずに踊るMIO。

夕日を浴びての「プラクシス・ノヴァ」のステージは、お世辞にも感動的なものとは程遠かった。ポルトガルギター2人、ギター1人、ヴォーカル2名、総勢5名のグループだ。スピーカーから出て来る音のバランスがひどい。エコーばんばんのボーカル。まるでカラオケだ。向こうの連中は、ともかく残響音が好きだ。コンサートのときでも、容赦なくリバーブをきかせる。全く無いのも唄いづらいが、あり過ぎは、気持ち悪い。

客席からMIOと二人、大声で「コインブラ」を歌ったお蔭で、控え室になっているテントの前で、メンバーと話すことができた。テントの中からは、MIOの歌声が聞こえてくる、ギタリスト達と大乗りだ。

私の20才の頃は、あんなに輝いていたのだろうか。「なぜ、その輝きを大事にしようとならないの？穴ぐらに、もぐろうとばかりしているあなたのことが心配なの。」バイト先の、10才ほど上の先輩に言われた言葉を思い出す。汚れたもの、人々から疎まれてるもの、市民生活から排除されようとするもの、棄民となって体制からドロップアウトしたかった。この世が、権力者にとって都合のよいものであるのなら、私は、世の為になる人間にはなるまいと。そんな私が今、ファドを唄っている。聴いてくれる人たちの拍手に生きる手応え、不安を感じながら。

7月24日に放映された「一本の道」のビデオがNHKのディレクター角野氏から送られてきたのは、8月お盆の前頃だった。うまくまとめたね、角野さん。アナウンサーの結城さんの語りの随所随所に、あなたの言葉が光っている。「抱えている悲しみが、サウダーデという言葉にかわる時、それは生きる力となるのかもしれない。」憎い程、言い得ている。なによりもフェルナンド・ペソアの詩「ぼるとがるの海」が心憎い程のタイミングで流れてくる。牛鳥さんのカメラワークも抜群。絵描きのジョアンや、ギタリストのカルロスのシーンが抜けてたけど、あなたの意図はしっかり貫かれていて(番組としての一貫性がないと言うことは、あちこちで聞いたけど、それは、月田轟眞の不満と解釈している)脱帽。40本、しこしこダビングして、各地で核になって私を応援してくれている人たちに送った。今年のお盆の思い出だ。あとは、BS、総合テレビでの放映を待ってもらうしかない。どうしても、一刻も早く見たいと思われる方は、御連絡ください。月田のできる限りで対処してゆきたいと思う。

昨年、マカオ政府観光局の仕事が入り(ポルトガルの観光局からは一向にお声がかからないのだが)各地を回っている。今年は、東京、鹿児島、長崎、福岡と回る。その後は北海道の秋のコンサートツアー。

北海道は一人一人が熱い思いで奔走してくれている。神戸、滋賀、広島、小諸、高山の根強い月田ファン主催のライブも続いている。ほんとうに嬉しく思う。年明けに、今年はどうなることかと、心配していたのが嘘のようだ。

そして、年末の2都公演「TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO 2000」の幕が上がる。

黒田清先生の思い出

ファド倶楽部を発足させるに当たって、会長を誰に頼もうかと思いがぐねんでいる時、以前一度だけ、ラジオ番組で一緒にした時、名刺をいただいたことを思い出し、図々しくも御自宅に電話をしたのが、7年前の初夏のことだった。運良くたまたまご在宅で、桃山台の駅の近くまで、サンダル履きで、丁度散歩にいい日和だとおっしゃって出てきて下さった春の終わりの晴れた日のことを思い出す。向かいの道から「おーい」と手を振る黒田さんは、元気で全身から力がみなぎっていた。初代のギタリストが「マリオネット」として独立して私のもとを去り、私はファド唄いとしての岐路に立たされている時だった。マイナーであることの厳しさ、苦しさを痛い程思い知らされていた頃で、その辛さを、随分吐露してしまったような記憶がある。「何もできないと思うけど、僕でいいんだったら、引き受けよう」と会長を引き受けて下さった。

ファド倶楽部会報の0号でこんなメッセージを寄せて下さった。「なんとなく放っておけない人というのがある。月田さんはそんな人だ。独り勝手にファドを歌っている。自分で後援会の名簿を作ったり案内状を送ったりして、黒字になるはずのないコンサートなどを開き、ふうふう言いながらもやめようとならない。大阪の片隅で、それでいてどこへでも飛んでいきそうな垣根のなさ。たよりなさ。そういえばファドにもそんなところがある。ずいぶん前のことだが、ポルトガルの田舎町で、見知らぬ人たちにおいしいポルトをご馳走になった。そのお礼も兼ねて、後援会長を引き受けた。」名もない人たちの心温まる出会いを忘れない黒田さんの人となりのあふれる一文だ。今になって、なおさら思う。

ご自分の番組にも呼んで下さって、15分ほど対談したこともある。台風の中で、テレビ局のビルも揺れる程の風が吹いていた。マイナーだからこそできること、一人一人の思いを大切に唄ってゆくことを対談を終えて心に誓った。そんな力を黒田さんは私に与えてくれた。

黒田さんのジャーナリストとしての偉大さに関して私は無知だった。それを一番最初に教えてくれたのは、会報に「エピソード帖」を連載してくれている内間さんだった。日刊スポーツの黒田さん連載の「ニュースらいだー」がなくなったのを教えてくれたのも彼だった。

私は、今でも、黒田さんが、この世にいなかったことを信じたくない。黒田さんの思い出話なんかしたくないのだ。

黒田さんが、一人一人の名もなき人、この地球の片隅で必死に生きている人の思いを大切に生きたように、ペンを走らせたように、わたしは、唄ってゆこうと思う。

さよなら 黒田 清さん

7月23日午前2時25分、黒田清さんがこの世を去られました。奇しくも黒田さんの病状を案じた会報27号が会員の方々に届いた日でもありました。たくさんの方々から驚きと共に、享年69才という早すぎる別れを悼む電話、ファックス、手紙をいただきました。この場を借りて、お礼を言わせていただきます。

7月31日の午後、葬儀、告別式が、黒田ジャーナル・黒田家の「合同葬」として、大阪の太融寺で営まれました。炎天下、約1300人が参列。その際葬儀委員長を務められた大谷昭宏氏のお別れの言葉を、窓友新聞・追悼号から、黒田ジャーナルのご厚意により転載させていただきます。

愛弟子からの別れの言葉

大谷昭宏

黒田さん、あなたは、7月23日午前2時25分、ご家族、そして私たちスタッフの見守る中、帰らぬ人となられてしまいました。折しも、沖縄サミットのさ中。多くの方々、あの戦争の連載や、「戦争」展で度々沖縄を訪れていた黒田さんらしいお別れの時期だと話しておられました。

それと同時に、あの日は天神祭りの宵宮の前日。大阪の町のここに天神さんのお囃子の音が聞こえはじめた頃でした。幼いころ、その天神さんに早く出掛けたいのに、天神祭につきものの、鯉の照り焼きがなかなか噛み切れず、鯉を頬ばったまま、浴衣姿でお宮に駆け出していったと「たべもの紀行」に書いておられました。大阪で生まれて育てて大阪のお祭りが大好きで、一緒に読売を辞めた時も、一月のえべっさんのころでした。お互い恨みっこなし、ニコニコ笑ってやめような、と言っておられた黒田さんが、今度の別れもまた、鯉とお酒を両手に浴衣のまま駆け出していってしまったように思われてならないのです。

振り返ってみれば、黒田さんを病魔が襲っているとわかったのは、3年近く前の97年の8月でした。

この年の9月、膵臓がんと診断された黒田さんは、実に12時間に及ぶ手術に耐え、11月には退院、そしてレギュラーだったテレビ朝日の「やじうまワイド」にも復帰されたのです。

しかしその喜びは、悔しいことに、2年余りしか続きませんでした。2000年の声を聞いたのもつかの間、今年の1月、膵臓がんが肝臓に転移していることが明らかになったのです。4月窓友会のみなさんと楽しみにしていたお花見、「心はいつも花の下」、そんな言葉を色紙にサインしたあと、肝臓カテーテルの施術のために、再度、阪大に入院。しかし、時を同じくして膵臓がんの病魔が牙をむきだしたのです。

5月5日、私の居場所をやっと捜し出してかけてこられた病床からの電話は生涯忘れ得ぬものになりました。

「大谷アカンわ、日刊スポーツの連載もテレビのやじうまも降ろさせてもらう。残念やけど、もう無理や」

そのあと、長く長く続いた沈黙は、悔しさに歯を食いしばっていたのでしょうか。それとも涙をこらえておられたのでしょうか。

そして医師に2時間だけと無理を言って、体についていた全ての点滴の管を外させ、絶筆となる「ニュースらいだー 連休の歌 六甲おろしの大合唱」の原稿を書き上げたのです。

実に3566回ニュースらいだーの前身となる「ぶっちゃけジャーナル」から数えて4273回、88年の4月から12年余り、あの大手術の時ですえ一度の休載もなかったこのコラムは、あの日を最期について紙面に復活することはなかったのです。黒田さん、それにしても、書き続けたり4273回。ただただこうべをたれるばかりです。

7月24日、密葬の日、竹見台のお宅から吹田斎場に向かう途中、千里の町に朝顔が咲き乱れているのをご覧になりましたか。

思い出します。「窓」のコラムの「大きい車とけてちょうだい」。小学一年生の夏休み前、交通事故で逝ってしまった和也君のお母さんから、送られてきた朝顔の種。「旅することが大好きだった和也にかわってこの朝顔の種を日本中に旅させてほしいのです」。そんなお母さんの声に応じて、社会部長席に種を並べ、まあるっこい手で一つ、一つ、ティッシュに包んでいたあなたの姿が思い出されます。

新聞記者が最初に書く記事は交通事故が多い。だからこそ「きょうもあること、あすもあること、あさってもきっとあること」と思っはいけない。その一つ、一つにどれほどの涙があるか、どれほどの悲しみがあるのか」

黒田さんは、そんな思いを一粒、一粒の朝顔の種に託されたのではないのでしょうか。

事件や事故に関わることの多い社会部記者、とりわけ事件記者の私たちに黒田さんが残された言葉も忘れ得ぬものです。

「新聞記者の仕事は人の死とかかわりが深い、それも自然ではない不慮の死、自殺、他殺、過失死、事故死といった変死事件に日常的に直面していかなければならない。その死の間近に立ち、乾いた文章で報道することは、たしかに記者の仕事の一つなのだが、その死を世の中によくあること、またあったこととして片付けてしまっはいけない。乾いた文章の裏側でその死を悼み、悲しみ、泣き、憤る濡れた心がなくてはならない」

これは黒田さんが、事件記者、いや、日本中の社会部記者に生涯を通じて送り続けたメッセージではなかったでしょうか。

黒田さん、あすはもう8月、あなたが、あの丸百貨店で、8回にわたって開催した「戦争」展の季節です。

戦争シリーズ、「戦争」展について黒田さんはこう書いています。

「私は、ひそかに、しかし非常に強く思っていることがある。それは、論理やイデオロギーでは戦争はなくなれないということである。もし、戦争という怪物と闘うことができるとすれば、それは情念でしかないのではないか。戦争で夫を奪われた、息子を亡くした、親がいなくなった、その悲しみから湧き出てくるドロドロとした情念、それを共感し、伝えることによってしか戦争を止める力は出てこないと思う」

しかし病魔と闘っている最中に次々と国会を通してゆく、黒田さんが戦争準備法と名付けた数々の法案、あなたは、この国の危うさに歯ざりする思いの死ではなかったでしょうか。私たちもまた残念でなりません。

7月21日深夜、自宅で療養なさっていた黒田さんは、容体が急変、救急車で搬送されました。その時、付き添ったお嬢さんの重子さんに薄れゆく意識の中で言われた言葉は「長田の福俵酒は、売れているらしいでえ」だったと聞きました。幸福の福に、にんべんに幸せと書くこの福俵酒は、あの震災の神戸長田神社前商店街のお店が復興を祈って売り出したお酒です。このお酒をあちこちで宣伝していた黒田さん。同時にあの震災の取材、寒風の中、防寒服で着るまのようになりながら、メモを片手に被災地を歩いていた姿がまた蘇ってきます。

ensaio

黒田さん、あなたが亡くなって大勢の記者から、私たちに様々な言葉が寄せられています。先日、東京のテレビ局の記者がこんなメモを置いて行かれました。

「私が駆け出しの記者のころ、兄貴分と慕っていた記者が時々、胸ポケットから古びた紙切れを出しているのに気づきました。それは小さな新聞の切り抜きでした。そこには『新聞社で一番偉いのは社長でも重役でもない。記者が一番大事なんだ。そして記者たちは大衆の代弁者でなければならない』と書かれ、筆者の名前は『黒田清』と記してありました。先輩が『時々、読むんだよ』とちょっぴり恥ずかしそうに切り抜きをしまいこんだのを覚えています。どうか、黒田魂を消さないで下さい。」

黒田さん、多くの記者がいま胸のポケットに、そして心のポケットにあなたの言葉をしまい込んでいることでしょう。黒田さん、あなたにまだどうしても、安らかにお休み下さいと申し上げる気持ちにはなれません。どうか天国からも、記者たちに、そしてこの私たちの社会にワープロの活字の雨を降らせ続けて下さい。

そして、夏には生ビールで鱧を、冬には熱燗で、てっちりを思う存分、召し上がって下さい。そして今度こそ、疲れた時には、無理をなさらずにそっとお休み下さい。

黒田さん、黒田社会部長、本当にたくさんのご事をありがとうございました。そして、悔しくて、残念だけど、さよなら、黒田清さん。

cartas

●暑中お見舞い申し上げます。本日はFADO CLUBE JORNAL No.27 ありがとうございます。いつも楽しみに読んでおります。お礼申し上げます。

昨夜は黒田清氏の訃報をテレビニュースで知り驚いておりました。今日は会報で黒田様の記事を読み悲しみも深くなりました。

フアド倶楽部ができて、黒田様が会長に就任されて…あの頃を思い出し、会報の1号その他を読み返してみました。会合に出席した日、ポルトガルのワインを傾け黒田様は会長就任の乾杯をしました。間近に月田さんの歌声があり、ギターの心にしみ込むような音色があり、暗い会場には語り合う声もあり楽しかった。酔った気分になった(私はアルコールは余り飲めない)私には、少年少女に戻ったようなそこに集まった人たちに、初めてお会いした人ばかりなのに、サウダーデを感じておりました。あの時の黒田様を思い出し、たった一回しかお会いしてないにもかかわらず、とても親しかったお方がこの地球とお別れしてしまった悲しみに沈んでいます。ここに深くご冥福をお祈り申し上げます。きっと天国から月田さんのますますの成功と幸せを祈って下さっていると思います。

大阪に在住の時はこの「函館」の一言でサウダーデを感じたものですが、今、大阪を離れてみますと、月田さんの会報が届くと、CDを聴くと、大阪にサウダーデを感じるのです。27年も暮らした土地、私の第二の故郷ですものね。

ハイビジョンがないので今夜は放送を通してあなたにお会いすることさえできませんでした。残念です。NHKさんが、早く再放送して下さいを念じております。

秋の北海道公演には函館は「ナシ」ですね。来年には又函館を予定して下さいませようお待ちしております。

暑い日が続きます、お体を大切にお励み下さいませ。

(函館/Y.M)

(来年は、きっと函館でコンサートをします。今度は、なるべくたくさんの人に安く聞いてもらえるコンサートをね。)

●久しぶりの雨で少しは涼ぎやすくなりました。昨24日FADO27号拝読いたしました。お元気ですか?とのメッセージをいただきとても嬉しかったです。夫は23日に72才。私は半年若く71才半、おかげで元気に過ごしています。

何よりも昨日朝刊で黒田清さんの訃報を知り、その日に会報が届くとは…。黒田さんは直接には存じ上げませんが長男が大学に入った年、知人の紹介で読売新聞にアルバイトとして4年間勤めました頃社会部のデスクをしておられました。バイトですから昔でいう給仕のようなもの薫陶を受けることもなかったと思いますが、私にとってはとても身近に感じられる方でした。戦争や社会の日の当たらない部分を積極的に取り上げられ正義感の強い方であり又一方飾らない人柄がとても好きでした。月田さんの大ファンであることも月田さんの文を読むと通じるものがあり解るような気がしていました。とかく金や物に毒されて失われてゆく大切なものに対して目を向けられ権力におもねず、信念を持った生き方にはとても好感を持っていました。これからの御活躍に大きな期待を持っていただけに、その早すぎる死は惜しみても余りあります。今朝の天声人語にも黒田さんを偲ぶ文が載っていました。これからの日本にとってほんとうに生きてほしい大切な人が次々と六十代で癌のため亡くなられるのはとても残念でなりません。月田さんもどれ程か深い悲しみと喪失感を持たれたことでしょう。心から故人のご冥福をお祈り申し上げます。

昨日、NHKの予告編で「一本の道ーサウダーデの道」が放映されるというのでとても楽しみにしていましたら、衛星ハイビジョン放送だけのようがっかりしました。うつらうつらとしながらアレキヤってる、横長のハイビジョンが映っているところ懸命リモコンのスイッチを押している(つもり)で目が覚めました。ひょっとしてと思ってつけてみたらエルサレムの再放送でした。三年ほど前に行きましたが強烈な印象に残る旅行でした。今、クリントンが最後の仕事としてかけている中東和平、日本人には理解し難い宗教の葛藤、イスラエル人とパレスチナ人は日常生活の中ではそれなりに共存できているのに政治問題となるとなぜあのように困難になるのか。あのエルサレムという小さな場所にユダヤ、キリスト、イスラムと三つの宗教が集まってしまったのか、人間は何故何千年という歴史の中で学んできたことをよい方に生かせないのかいろいろと考えさせられました。黒田さんはどうおっしゃるでしょうね。

いつも月田さんの記事を読みながらはるか遠いポルトガルのことを懐かしく思い出します。去年のサンケイホール以来ですが、今年も都合がつけばぜひ行きたいと思っています。好きなお酒とフアドをいつまでも楽しめるようお体には充分気をつけて下さい。

cartas

大切な人との永遠の別れほど人生で辛いものはありません。ぽっかり空いたその穴を埋めるには長い歳月が必要です。悲しみは時を重ねることでは癒すことはできません。お慰めする言葉はありません。涙を流すことが一番だと思います。

(大阪/I.A子)

(3年前のBS「世界わが心の旅」で、一つの村がイスラエルとエジプトに分断され、金網と鉄条網ごしに互いの安否を大声で尋ね合う家族の姿に、黒田さんが、金網に手を掛け涙を拭っていたシーンが頭に焼き付いています。民族、国、宗教の違いで何故人は争いをしなければならないのか。戦争という現実の前で、何ができるというのか。一人の人間として、悲しみと、憤りと、無念さといういろいろな思いが交錯していたのでしょうか。)

●ポルトガルの海の色の封筒とヒマワリの輝くような切手付きの会報ありがとうございました。ファドへの想いがあふれる温かい夏号でした。アマリアさん黒田清氏と大切な素晴らしい人を失った月田さんへ、私の想いを一つ。

灼熱の太陽に覆われた樹々は
そよぎを忘れ うなだれ
川の流れば
囁きをひそめ 静まった

ファドを口ずさむ歌姫は
黒い裳裾を長くひきずり
どこへ行くのか
乾く瞳を 遠く 彼方に向け

あなたのサウダウデは織りなす綾となり
敷き詰められた その中に
身を投げ出して 泣く夜も あるけれど
サウダウデはあなたを
朝の光の中 活気に満ちた リスボンの港町に
連れていってくれる

苦しみから 解放たれて逝った人が
あなたに 残した愛を 歌うため

(京都/N.N子)

(私は、歌いつづけます。黒田さん、あなたを忘れないために。)

●1997年2月9日夜。熟年男3人でリスボン、アルファマ地区の小路にあるファド屋を訪れた。10時を回ったころだろうか。50人ほどの客が大声で喋りながら飲み食いしている。店内は人いさげとたばこの煙で先の人の顔がぼんやりするくらいだった。こんな雰囲気でも聴く歌ってどんなのだろうと疑念がわき、期待と興味が薄らいでいく気分だった。同行の2人には「リスボンに来たらファドを聴かずして帰れない」という強い思い込みがある。着席した瞬間から店内と一体化した様子で、旨そうにワインを飲んでいる。前夜遅くアムステルダム空港に着き、この日はリスボン市内を歩き回って疲れている。一人だけホテルに戻って寝た方が楽なのになあと考えていたら、さらに灯りを落とした店内にポルトガルギターの音が弾んだ。

小さな舞台上に男女4人の歌い手が入替わり登場し、切なく、激しく、

朗々と「ポルトガルの魂」を高く、低く響かせる。盛り上がった頃合を見計らって、先ほどまで入り口で客引きをしていたおじさんが歌い出す。何かエッチな歌らしく、客席がどっと笑いはじける。拍手と歓声、口笛で盛り上がってゆく。

これは何だ。昭和30年代に流行った日本の民謡酒場の盛り上がりと同じではないか。音楽は国境を超えて一とはこういうことかと一人合点する。そう納得すると、あとはいつものノリ。歌詞の意味は全く解らない。旋律だって違うのに飽きさせない。いつの間にか眠気も覚め、一曲ごとに手を叩く。強く、大きく。単細胞なんだなあ。でも、いいじゃない。民族の別はあっても聴く側にも心があれば魂は通じるはず。ポルトガルの人たちは、いつでも、どこでもすぐ同化できる歌を持つ国民だなあと羨ましく思えたのであった。ファドとはこうして出会った。

ひと月ほどあと、月田秀子札幌公演に関わった。北海道で初の公演だったが、700席の会場は満杯になった。お客さんは札幌だけでなく、遠くからJRや車で駆け付けた人も大勢いた。ファドファンは道内でもたくさんいるんだと認識を新たにした。同時に月田秀子の乙張りのきいた歌いっぷりに魅せられてしまった。

今回の北海道公演は旭川を皮切りに合わせて5か所。これまで同様、行商スタイルのチケットさばきで成り立っている公演日程だが一人でも多くの人に月田秀子のファドを聴いてもらえたらと思う。四季の区別がはっきりしている北海道の秋は月田とファドに良く似合う。ナナカマドの実も色づいた。

(北海道ファドファン倶楽部総括/早坂 正)

(「私は、北国の冬の厳しさを知らない。この三年間で私が知ったのは、この北国に住む人たちの、屈託のない明るさ。遠く関西で孤軍奮闘している私をここまで連れてきてくれたファンの方々の熱い想い。冬の北海道の家の中は裸でいられる程の暖かさだという。雪に閉ざされ、陽も射さない日々の中にいるからこそ、来たるべき春を待ち焦がれ、心の中には太陽を、真夏の青空を、思い描くことができるのではないだろうか。ポルトガルの人たちの大切にしている“サウダーデ”の原点を、厳しい自然とある時は戦い、又、ある時は抱かれながら生きる北国の人の心の中にみる思いがする。サウダーデは、過去への、帰らぬ人へのノスタルジーであると共に、いまだ来たらずものへの夢、あこがれでもあるのだから。」北海道公演のプログラムに寄せた挨拶文より。)

●ありがとうが言いたくて!!

伺ってよかったー。レクイエムでした。ポルトガル語は解りませんが、心は総身で受け止めることができ、涙を隠すのに苦労しました。40年来の親友を失った悲しみを抱えて半年、若い時の親しい人との別れには思ってもみなかった痛みを消すことができずにいました。大きな大きな「いやし」を頂いて戻りました。また、お目にかかれる日をお与え下さい。本当に本当にありがとうございました。

(島田/山姥)

●歌手の月田女子、大層な良き楽器(ハスキーボイス)をお持ちの方で幸せですね。良き楽器(のど)と大地に根を下ろした、又は人間の叫びの原点を探求する精神が良かったです。小生の好みではほとんどスタンダードナンバーになっていると思いますが「暗いはしけ」が好きです。

(藤沢/K.K)

ficção

読切連載
秀子のエピソード帖「会えて、よかった」
中間 天馬

私、告白します。泣きました。久しぶりに随分泣きました。涙もろいのは、けって歳のせいではありません。この本のせいです。今年のはじめ頃、ある本を求めて書店に行きました。目的の本はすぐに見つかりました。が、その隣に、まさに、私に買ってください、とばかりにこの本があったのです。反射的にこの本をレジに持っていき、電車の中でおもむろにページを繰りました。とたんに涙があふれてきました。次のページも、その次のページも…。これは一体どうしたことなのか…。

私のポロ靴には常時2、3冊の本が入っていますが、読み終えたら、たいていの場合すぐ処分します。ところが、この本の場合、もう9か月も靴に入れたままです。これは今までになかったことです。浅田次郎さんの「鉄道員(ぽっぽや)」に多くの人が涙したと聞いています。彼の慈愛に満ちた素晴らしい創作です。ところが、この本はすべてノンフィクションなのです。25人が登場します。彼らの苦難と希望の人生が、著者との交流を通して描かれています。先天性小児マヒの雅代ちゃんは、二度の大きな手術の後、松葉杖で歩けるようになりました。不自由ながら生まれて初めて一人で歩く彼女のうしろから、いたずらっ子達が遠慮なく彼女の歩く真似をして囁立てます。雅代ちゃんは、「あんたたち、真似するの下手ねえ。ほら、こうするのよ、見てごらん」と言いながら、子供たちに向かって

歩きはじめます。彼女は必死です。ここで負けたら一生おびえて生きていくことになる…。びっくりして後ずさりしていた子供たちは、やがて彼女に近寄り「お姉ちゃん、どうして、そんなになったん? 病気、交通事故?」。雅代ちゃんは答える。「小児マヒという病気なんや。おかしいやろ?」。子供たちは、みんな首を横に振った。西の空の夕映えの中を彼女は歩きはじめた。気がついたら道の真ん中を歩いていた…。

苦難の人生の中で、たくましく希望の灯を求める25人の歩みを見つめる著者の暖かいまなざしに、真のジャーナリストとは何か? という問いかけがあるように思えてなりません。この著者が当ファド倶楽部の会長であった事を、私は誇りに思います。かつて彼がいた新聞社の社長は、料亭で政治家と会うのを常とし、一千万部も売れば、政治家も動かせるんだと豪語する。それに対して、常に権力に立ち向かい、弱者の視点を抱き続けたこの著者の大きな柱は、「戦争反対」と「差別反対」でした。日本は真の偉大なジャーナリストを亡くしました。しかし、黒田さん、あなたの意思は必ずひきつがれまっせー。合掌。(ナベツネはん聞いてまっかー!)

えっ? この本とコラムとどういう関係があるのかって? ええとー、あの一、急にそんな事言われても、ボク、困っちゃうな…。あ、そうそう、この本、月田さんに貸したんです。彼女の涙でしようかねえ、グショグショになって返ってきました。

皆さん、是非ご一読を。「会えて、よかった」黒田清著。93年三五館発行。

(もし手に入らない場合月田までご一報ください。)

vamos cantar!

孤独な女のひとり言

訳詞: Caldo Verde

ひとりぼっちで 気が狂いそう
共に居るものは 何もない
道のように さんざん踏みつけられて
忘れられているのは もうたくさん
友情への憧れが 膨らんで
せつない思いで はちきれそう

ああ いつの日か
この寂しさを つき破り
孤独の盃に 愛の歌を注ぎ込もう
高く高く あの頂きに行き着こう
もっと遠くに もっと遥かに
なぜって 私は
自分を信じているから

街に出ると 気が狂いそう
妬みの炎に 身を焦がす
陽のあたる日を ずっと夢見てた
小道 近道 遠い道
お祭りなのに 居場所もなく
今の私は 余りもののパンの屑

FALA DA MULHER SOZINHA

Letra: Paco Bandeira / Eduardo Olímpio
Musica: Paco Bandeira

Já estou louca de estar só
Acompanhada de nada
Já estou cheia de ser rua
Tão corrida tão pisada
Já estou prenhe de amizades
Tão barriga de saudades

Ai eu ainda um dia irei
Rasgar a solidão
E nela entrelaçar
O olhar de uma canção
Chegar ao cume, ao cimo, ao alto
Mais longe, mais além
Mas a saber que sou alguém

Na cidade sou loucura
Sou begónia sou ciúme
E eu que sonhava ser lume
Caminho, atalho, lonjura
Não tenho acento na festa
Sou a migalha que resta

informação

- 10月28日(土)は、ポルトガル文化センター主催で、ポルトガルから、マルガリーダ・ベッサを招いてのディナーショーです。主役はあくまでも彼女であり、私は、応援に駆け付け2曲歌う予定です。彼女の癖のない、美しい歌声、一度聴いてみませんか?
- 12月12日は、久方振りの五木寛之論楽会。三上寛、山崎ハコさんと共に出演。2曲歌います。
- 年末恒例になりました『月田 秀子 FADO CONCERTO 2000』は、12月2日(土)大阪「サンケイホール」、12月18日(月)「博品館劇場」で開催されます。今年は、「あなたを忘れないために」というサブタイトルをつけました。ゲストにピアノの安次嶺悟さん、バイオリンの平松加奈さんをお呼びして、ちょっと味付けの違うファドをお送りしたいと思っています。皆様お誘い合わせの上ご来場くださいますようお願いいたします。

<月田秀子のスケジュール>

9月 25日 (月)	大阪・心齋橋「アートクラブ」	*問 合 せ : 06-6212-2870
28日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問 合 せ : 075-361-3535
10月 5日 (木)	北海道・旭川「ニュー北海ホテル」	*問 合 せ : 011-773-0121 (千田)
6日 (金)	北海道・札幌「ジャスマックザナドゥ」	*問 合 せ : 011-773-0121 (千田)
7日 (土)	北海道・恵庭「恵庭リサーチビジネスパーク」	*問 合 せ : 011-773-0121 (千田)
10日 (火)	北海道・釧路「釧路生涯学習センター」	*問 合 せ : 011-773-0121 (千田)
11日 (水)	北海道・帯広「JRノースランドホテル」	*問 合 せ : 011-773-0121 (千田)
18日 (水)	神戸・三ノ宮「スペイン料理・カルメン」-アマリアを偲んで-	*問 合 せ : 090-5069-1840
26日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問 合 せ : 075-361-3535
27日 (金)	奈良・史跡文化センター「スミセイライフミュージアム」	*問 合 せ : 06-6311-0618
28日 (土)	東京「マルガリーダ・ベッサ/ディナーショー」	*問 合 せ : 03-3586-1792
30日 (月)	大阪・心齋橋「アートクラブ」	*問 合 せ : 06-6212-2870
11月 1日 (水)	大阪・南方「三裕の館」	*問 合 せ : 06-6304-1745
5日 (日)	広島・上八木「アビエルト」	*問 合 せ : 082-873-6068
6日 (月)	山口・「下関グランドホテル」-海峡を望んで-	*問 合 せ : 0832-22-1515 (鈴尾)
11日 (土)	長野・小諸「小諸ユースホステル」	*問 合 せ : 0267-23-5732
12日 (日)	岐阜・高山「あ蔵」	*問 合 せ : 0577-36-2111
15日 (水)	奈良・王寺「アンデルセン」	*問 合 せ : 0745-31-4679
20日 (月)	大阪・心齋橋「アートクラブ」	*問 合 せ : 06-6212-2870
30日 (木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問 合 せ : 075-361-3535
12月 2日 (土)	大阪・桜橋サンケイホール 【TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO 2000】	*問 合 せ : 06-6345-5062
10日 (日)	北海道・支笏湖「湖水館」	*問 合 せ : 011-773-0121 (千田)
12日 (火)	東京・銀座マリオン「五木寛之論楽会」	*問 合 せ : 03-3437-9584 (文芸企画)
18日 (月)	東京・銀座博品館劇場 【TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO 2000】	*問 合 せ : 06-6345-5062
25日 (月)	大阪・心齋橋「アートクラブ」	*問 合 せ : 06-6212-2870
27日 (水)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問 合 せ : 075-361-3535

<お詫び>11月のアートクラブのライブは1週間繰り上がって20日(月)、12月の巴里野郎での最後のライブは、1日繰り上がって27日(水)になりました、ご了承ください。

<編集後記>

様々な人に出会う。歌手活動がらみでどこまで信用していいのか、戸惑う事がある。人の善意にどこまで甘えていいのか。大言壮語のイカサマ師には御用心。何よりも、私利私欲なく付き合える友のいる事に感謝しつつ、オリンピックはさておいて会報の発送作業にとりかかる。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~wc3k-smz/FADO/menu.html>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第28号
- 2000年10月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808